

スポーツイベント

ハンドボール

1981 (昭和56)

2月10日

金曜日

第8号
 (毎月10日・25日発行)
 発行所：日本ハンドボール協会

定価 3,000円
 購読料 (半年) 15,000円
 1部 1,500円
 郵送料別



NECオファイスコンピュータ
NEACシステム100
NEC
 日本電気

発行所：スポーツイベント 編集：日本ハンドボール協会
 〒100 東京都千代田区千代田1-1-1
 (日本ハンドボール協会内)
 電話：03(324)4671

やはり厚かった「世界の壁」



「新生全日本」の善戦も一歩及ばず

激戦続きの世界男子選手権

「世界の壁」が厚かった。日本代表は、世界男子選手権で善戦したが、一歩及ばず。大会は、激戦続きで、日本代表は、善戦したが、一歩及ばず。大会は、激戦続きで、日本代表は、善戦したが、一歩及ばず。

世界男子選手権は、激戦続きで、日本代表は、善戦したが、一歩及ばず。大会は、激戦続きで、日本代表は、善戦したが、一歩及ばず。大会は、激戦続きで、日本代表は、善戦したが、一歩及ばず。

世界男子選手権は、激戦続きで、日本代表は、善戦したが、一歩及ばず。大会は、激戦続きで、日本代表は、善戦したが、一歩及ばず。大会は、激戦続きで、日本代表は、善戦したが、一歩及ばず。

**惜しくも12位
経験不足を露呈**

世界男子選手権は、激戦続きで、日本代表は、善戦したが、一歩及ばず。大会は、激戦続きで、日本代表は、善戦したが、一歩及ばず。大会は、激戦続きで、日本代表は、善戦したが、一歩及ばず。

2 / 3 頁
 関連記事

総体五連覇 今なお語り草



指導手腕に定評の
稲石三三氏

指導手腕に定評の稲石三三氏

妥協排し 陽の当たらない道

稲石三三氏は、1950年代から1970年代にかけて、日本のハンドボール界に大きな影響を与えた指導者である。彼は、選手たちの技術と精神力を鍛え、数々の全国大会で優勝を収めた。その指導スタイルは、厳格さと情熱の両方を兼ね備えており、選手たちからは「稲石流」と呼ばれる独自の指導法が受け継がれている。

腰を割ったブレーが大切では

稲石三三氏は、ハンドボールの指導において、選手の身体能力を高めることに重点を置いていた。特に、腰の柔軟性を高めることは、選手にとって非常に重要な要素であると彼は考えていた。彼は、選手たちに「腰を割る」という言葉を教えた。これは、腰の柔軟性を高めるためのトレーニング方法であり、選手たちのパフォーマンスを向上させるのに大きく貢献した。稲石氏は、選手たちの成長を常に監視し、彼らに最適な指導を提供するために努力した。その結果、彼の指導した選手たちは、数々の全国大会で優勝を収め、日本のハンドボール界に名を残している。

稲石三三氏の指導スタイルは、選手たちの成長を促すだけでなく、彼らの精神力を鍛えることにも重点を置いていた。彼は、選手たちに「妥協排し 陽の当たらない道」という言葉を教えた。これは、選手たちが困難な状況に直面したときに、決して妥協せず、最後まで戦い抜くという精神を養うための言葉である。稲石氏は、選手たちに、どんな状況でも諦めず、最後まで戦い抜くことを教えた。その結果、彼の指導した選手たちは、数々の全国大会で優勝を収め、日本のハンドボール界に名を残している。

稲石三三氏は、1950年代から1970年代にかけて、日本のハンドボール界に大きな影響を与えた指導者である。彼は、選手たちの技術と精神力を鍛え、数々の全国大会で優勝を収めた。その指導スタイルは、厳格さと情熱の両方を兼ね備えており、選手たちからは「稲石流」と呼ばれる独自の指導法が受け継がれている。

スポーツイベント・ハンドボール第8号

1978年2月10日発行 1面記事

やはり厚かった世界の壁 「新生全日本」の善戦も一步及ばず

日本悲願の“ベストエイト入り”は遂に成らなかった。第九回男子世界選手権（Aグループ）での日本の戦いぶりは、まさに「善戦むなし...」という表現がピッタリであった。日本の順位は、大会参加十六ヶ国中十二位。やはり“世界の壁”は厚く、そして、このうえなく高かった。新生全日本の“若さ”に、その再起を期待したい。

激戦続きの世界男子選手権

惜しくも12位 経験不足を露呈

しかし、日本の戦いのあとを振り返ってみると、決して悲観するには当たらない。

事実、大会第一日の結果を伝える外電は、ルーマニアが東ドイツに敗れた波乱を報じたあと「さち驚くべきは - - 」とつないで「日本がポーランドを徹底的に苦めたことだ」と続け、スウェーデン戦のあとと同じように日本の健闘が特筆された。

また、日本の所属したD組を取材した各国のライターをはじめ、ポーランド、スウェーデンのコーチングスタッフも日本の粘り強さに舌を巻き、「日本は十分ベストエイトで戦う力を持っている」と高い評価を下していた。

スコアを追うと、さらに日本の善戦ぶりがはっきりと分る。日本はどの試合も終盤まで互角、あるいはそれ以上に健闘した。

勝機はポーランド戦、スウェーデン戦とも間違いなくあったのだ。

裏を返していえば、幸田団長、竹野監督らチームスタッフにしてみれば「善戦空しく」というよりも、むしろ「悔いの残る大会」であったかも知れない。

日本の崩れは後半5～15分、あるいは10分～20分ということで共通していた。

スタッフをはじめ選手たちは、「あの1点さえ抑えれば - - 」「あの一本を決めていれば

- - 」と歯ざしりしたはずだし、“悔やみ”を今回ほど痛感したこともあるまい。

しかし、この「1点」、「1本」の差が、実は「ベストエイトへの壁」であり、「世界上位への重いトビラ」なのだ。

簡単に登れないもしないし、押し開くこともできない。

「1点」、「1本」の差は短距離ランナーが一秒を縮めるのに等しい”死にもの狂いの努力”を積み重ねなければ突破できない重みと厚みがある。

ヨーロッパの一流国を相手にした場合、日本選手の心身の疲れは国内ゲームの一試合半から二試合分にあたるといわれる。コーチングスタッフも、それを百も承知で強化合宿の大半を高校なみの体力強化にあてたが、それでもなお、この“真剣勝負”の場ではスタミナ不足が日本の大きなウイークポイントとして指摘されるのだ。

国際試合、ましてやオリンピックや世界選手権ともなれば、「スタミナ」は肉体的なもののみを意味するわけではない。相手の気力を上回る精神力、ひとつのパス、ひとつのシュートにかかる集中力、観客の怒号に耐え、自らのペースを見失わない判断力など、あらゆる“要素”を含めての「スタミナ」が要求される。日本選手はこの点で、どうしてもヨーロッパ勢に及ばない。

その原因の第一は、あまりにも国際経験が少ないことにある。

「地域差は敗退の言い訳にはならない - - 」とは、日本協会関係者らがよく口にする言葉だが、競り合いに勝てる力は“なん度も競り合いを体験”しなくてはつかみとれない。

選手の奮闘ぶりが“モスクワ”に望み

そうした中で、今回の出場で具体的な大きな収穫があったことも見逃せない。ナショナルチームから木野、藤中、本田の三本柱が引退、“新生全日本”にとって初の国際舞台となったわけだが、予選リーグでは蒲生が著しい成長を見せて国際的に十分通用するアタッカーとしての力量を発揮したのをはじめ、ポーランド、スウェーデンに土壇場まで食い下がるチーム力も確認された。

選手たちの精いっぱい戦いぶりはモスクワ五輪への望みをつないだものといえるだろう。

戦いすんだ今、ベストエイトが一步一步と近づいてくる手ごたえがあった反面、“胸つき八丁”にさしかかって一気に頂上を極めるエネルギーに、やはり不安を抱かせたことも確かだった。

上位七チームがモスクワ出場権を獲得したのに対し、日本は来年に予定されるアジア大陸代表権（一カ国）決定戦でモスクワへの切符を手にしなければならない。

「なにが不足なのか」「なにを満たしたらよいのか」- - その究明を徹底的にしない限り、“善戦”は、それこそ善戦のまま片付けられてしまうだろう。全力を尽くした代表チー

ムには過酷かも知れぬが、とにかく道はまだ険しい。

そして世界の壁は高くて厚い。その壁を破るのは選手ではなく、日本協会を中心とした
“頂点”の思い切った前進姿勢といえるだろう。

妥協排し “ 陽の当たる道 ”

指導手腕に定評の稲石三二氏

二月二十六日から名古屋市で行われる初の高校選抜大会に、名門・桜台高校（名古屋市立）が出場する。桜台にとっては昭和四十七年（山形インターハイ）以来、六年ぶりの全国大会への顔見せである。“桜台 といえばハンドボールマンで、知らない者はいないといえるほどの名門中の名門校。現在までに幾多の名勝負を生み、数え切れないほどの名選手、全日本選手を世に送り出してきている。この桜台を、昭和二十五年から率いて、桜台とともに生きてきたのが稲石三二（いないし・さんじ）氏（47才）だ。指導者としての王道を極めた人だが、その情熱は、まだまだ衰えてはいない。地元名古屋で行なわれる高校選抜を心待ちにしながら、久しぶりに燃えているひとりでもある。

総体五連覇 今なお語り草

ハンドを語り、教え子を語るとき思わず知らず、顔がほころび、ほころび、とくに「あの試合の、あのプレー」を思い出しながらの話になると、身ぶり手ぶりよろしく、その名古屋弁も熱っぽくなってくる稲石氏だ。

確かに高校界の歴史の中で、数々の名勝負が桜台とともにあり、稲石氏とともにあったといっても過言ではない。そんな名勝負を生き抜いてきた年輪が、その柔和な表情のなかにもうかがわれる稲石氏だが、もう一度 “桜台旋風” を、という情熱は失われてはいない。昭和五年豊橋市に生まれ、豊橋二中（現豊橋東高）で陸上競技に熱中していた稲石氏。陸上を続けようと昭和二十二年日本体育専門学校（現日体大）に進学。ところが、終戦後の物のない時代で、その日学校へ行くことよりも、その日の食糧を求めて歩く毎月で、陸上どころではなかった。

そんなある日、同期の勝繁夫氏（のち立教大へ進学、現立教大監督）にハンド部へこないかと誘われた。陸上に未練がある稲石氏がいまいな返事をしていると、次の日にハンドの上級生部員に呼ばれることになる。

何事かと小さくなっている稲石氏に、ベッドからムックリ起き上がった上級生、ジロリと稲石氏を見てひとこと「ハンドをやりたいというのはおまえか。明日からボールとネットを持ってグラウンドへ出る。」

稲石氏はビックリしたが、思わず「ハイッ」と答えてしまった。

「勝君にしてやられたという感じだった」というのが稲石氏のハンドとの出会いだった。しかし、この勝氏の目に狂いはなかった。

陸上で鍛えた下半身という財産を持っていた稲石氏はハンドマンとしてもメキメキと上達して、日体のハーフバックとして不動の位置を築くようになる。小柄ながら敏しょうな動きで、フェイントも切れ、機を見て攻撃にも参加、得点もするという活躍。まさに“目を離せないハーフバック”として、敵を悩ませたものだったという。

卒業後も、桜台の監督をつとめるかたわら、愛知一般男子の一員として、昭和三十年の神奈川（平塚）国体までグイグイとチームを引っばって活躍していた稲石氏だった。

腰を割ったプレーが大切では

日体時代を通じて親しまれる笑顔と人柄の好さで上級生にも可愛がられ、「その名をもじって「サンちゃん、サンちゃん」と呼ばれて他大学の選手にも人気があった稲石氏。

現在でも愛知県で理事をつとめ、人あたりの良さと技術通を見込まれて、毎年NHK名古屋TVが放映する「東海室内選手権」(今年は二月十九日)では解説者を引き受けている。

昭和二十五年、日体を出た稲石氏は、桜台でハンド部を創り、指導していた先輩の宇津野年一氏（現在名工大教授）に誘われ桜台につとめるようになる。そして、いよいよその手腕は冴え、翌二十六年にインターハイ優勝を飾ったのを皮切りに、インターハイ優勝を九回（うち五年連続一回、二年連続一回）、国体優勝九回（うち三年連続二回、二年連続一回）、二冠に輝くこと実に七回の大偉業を成し遂げるのである。

桜台高での稲石氏の指導ぶりは、かなり厳しいものであった。なにしろ、そのモットーが、“不言実行”だ。「理屈をこねる前に、まず動け」と要求、徹底的な走りこみを行なったという。下半身の強化が、ハンドの最初にして最後という考えの持ち主。どんな練習でも下半身強化に重点を置き、甘い妥協は許さなかった。

稲石氏が下半身に重点を置くのは「ステップの速さに、モーションの速さは比例する」という指導理念を持っているからだ。

こうした稲石イズムを受け継いで、ハンドの指導者になった者も多いし、数々の名選手も送り出している。浅野克彦、近藤金博・信行兄弟、服部和記、高村武彦、白神邦雄氏など数えあげればキリがない。

そんな桜台全盛時代を通じて、最も悔しかったのが、昭和二十九年の国体で現在全日本監督・竹野奉昭氏がいた熊本済々黌高に一点差で敗れた試合。前日食べたイカの刺身に当たったのか下痢を訴える者が続出して力を出し切れなかったこともあるが、熊本のじっくり型でスピードのない試合に敗れてしまったのが、何とも腹にすえかねた稲石氏だった。

「ハンドの魅力は何といてもスピード。これを取ったらハンドは味気ないものになってしまう - - 」という信念の持ち主だからだ。桜台のチームカラーはいつも稲石氏の考えを反映させたスピードのチームだったし、現在も稲石氏の信念は変わってはいない。

その後、卒業生の多くが進学した芝浦工大の臨時コーチも引き受け、十年以上も同大を指導、日本のトップチームにまで押し上げている。

また、その手腕をかわれて、昭和四十二年の世界選手権（スウェーデン）のために編成された全日本チームのコーチまでつとめて日本を十位に導いている。まさに指導者として王道、“陽の当たる道”を歩いた人といえるだろう。

「現在の全日本はずい分大型になりましたが、大きな選手こそ、もっと腰を割ったプレートをしなければいけませんね。そして日本が世界に追いつき、国内でも国際的なビッグイベントが行われるようになってほしいものですね」という稲石氏だ。選抜に躍り出た新生桜台の面々を見つめる稲石氏の日もますます熱を帯びてくる。